

同志社を創った人々

八田 英二	同志社大学長 同志社大学経済学部教授
奨励者紹介〔はった・えいじ〕	〔研究テーマ〕 日本経済の構造変化の検証

主はアブラムに言われた。
「あなたは生まれ故郷
父の家を離れて
わたしが示す地に行きなさい。
わたしはあなたを大いなる国民にし
あなたを祝福し、あなたの名を高める
祝福の源となるように。
あなたを祝福する人をわたしは祝福し
あなたを呪う者をわたしは呪う。
地上の氏族はすべて
あなたによって祝福に入る。」

（創世記 一二章一一三節）

「同志社」という名前

おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました学長の八田英二です。この重要文化財である同志社礼拝堂で、チャペル・アワーの奨励をするのは二年ぶりです。昨年は京田辺のチャペル・アワーで奨励をさせていただきました。ここでお話ができるということは大きな喜びです。この礼拝堂は一〇〇年以上も前に造られました。

この同志社礼拝堂は普段は中学校が礼拝に使っており、私が中学生の時は三年間、ここの二階に座って礼拝に参加していました。今日は「同志社を創った人々」という題で話せることを大変うれしく思います。壇上の正面にある中央の椅子は、新島先生が座られる椅子だということで、誰も座らないことになっています。ここで会合や礼拝が行われる時には、総長・理事長・学長は、あの椅子の隣に座ることになっています。時々新島先生の肖像画や写真が置かれる場合もあります。そのように、ここは由緒あるチャペルなのです。

今日は、新島襄が詠んだ三つの歌を中心に、同志社を創った人々の話をしていきたいと思います。

同志社というのは、学校法人の名前です。慶應義塾でありますと、「慶應」と時代の名前が入っています。早稲田は土地の名前でしょいか。明治大学も時代の名前が入っています。国立大学は土地の名前以外はつけないことになっています。同志社という名前は、同じ志を持った者の結社という意味です。それは誰かと言いますと、同志と呼ばれる人々、一人は新島襄であります。あと二人います。一人目は礼拝堂正面に向かって左側の肖像画の山本覚馬氏です。山本氏は元会津藩の藩士であります。山本覚馬の妹の山本八重さんは新島先生と後に結婚をされる方です。山本覚馬氏は盲目でしたが、しかし京都府ではとても力を持った人でありました。もう一人は一つ向こうの肖像画のジェローム・デイヴィス氏で、宣教師であります。この三人が同志社を作り上げた最初の同志と呼ばれています。それ以来、同志社に対する貢献者の肖像画がこの礼拝堂に飾られています。その向かって右側は、新島先生ですが、卒業されたアーモスト大学のジョンソン・チャペルにも肖像画が掲げられています。

武士の思ひ竜田の山紅葉

新島先生は安中藩の江戸屋敷でお生まれになりました。一八四三年二月十二日です。毎年、この日には東京の一ツ橋にある学士会館という建物の横に、新島先生生誕の地がありまして、そこで礼拝が行われます。私は毎年そこへ行き礼拝に参加しております。新島先生は安中で生まれたのではなく、生粋の江戸っ子であります。その後新島先生はいろいろな勉学をし、函館から脱国をされました。函館には、新島先生の脱国の碑が建てられています。新島先生が脱国をされた日は一八六四年七月十八日であります。二十一歳のときに固い決意を秘めて日本を離れられました。そのころは外国に行くことは禁止されていました。二十一歳ですから、今日歌っていただいたグリークラブの皆さんと同年ぐらいの年齢です。今は飛行機に乗れば簡単に行けますが、その当時はパスポートもなく、海外に脱出するということは、非常に大きな出来事であったと思います。新島先生は、江戸から船で函館に行きました。その船の中で詠まれた歌があります。

「武士（もののふ）の思ひ竜田の山紅葉 にしき着ざればなど帰るべき」

竜田川という水面に紅葉が浮かんでいる。故郷に錦を飾るという大きな決意を秘めて、江戸を離れ、まずは函館に向かいました。外国でいろいろな知識を吸収し、故郷の日本に錦を飾ろうと決心していたのです。

函館で福土卯之吉という日本人の青年と会い、彼の手引きでようやく上海に行く船に潜り込む手配が整えられました。一八六四年七月十八日で、船の名前はベルリン号です。船長の名前はセイヴォーリー船長でした。

私は、何年か前に日本の船長さんと話をする機会がありました。その船長に、「あちらこちらの国を訪れて、出航する時に一番気になることはなんですか」と質問したところ、「現地の人が潜り込んでいないかどうかをチェックするのが、船長の一番気にかかることだ」とおっしゃっていました。「密出国の人を船に乗せて出国すると、大きな処罰を受けるのです。そういう船長としての勤めがあります」と、その時おっしゃっていました。今から、一四〇年ほど前の一八六四年に、ベルリン号のセイヴォーリー船長はそういう日本人を乗せて出国してくれたのです。後日、そのことが発覚し、船会社に伝わり、セイヴォーリー船長は解雇されてしまいました。新島先生はそのことをアメリカでしばらくの間、知らずに過ごしていました。後に、自分を函館から出国させてくれたセイヴォーリー船長が、船会社を解雇されたことを知った新島先生は感激しておられます。この経緯を知らせた人はワイルド・ローヴァー号のテイラー船長でした。セイヴォーリー船長がいたからこそ新島先生は出国ができたのです。つきつめて考えれば、この同志社が設立されたのも、そういう大切な出会いがあったのだということを痛感いたします。

函館を出国しまして、上海に着き、そこで船を乗り換えることになりました。次に乗り換えた船はワイルド・ローヴァー号でありました。ボストンの船会社所有の船で船長はテイラー船長でありました。喜望峰を回って、ボストンへ行きました。ワイルド・ローヴァー号という名称がよく同志社では使われております。卒業生向けに発行している広報誌は「ワイルド・ローヴァー」という誌名です。体育会アメリカン・フットボール部の愛称も「ワイルド・ローヴァー」です。「ワイルド・ローヴァー」とは、新島先生を上海からアメリカまで運んだ船の名前です。テイラー船長は、新島先生にいろいろな世話をして、ボストンに連れていってくれました。アメリカで勉強したいと言った新島先生にその船会社の船主のハーディー氏を紹介してくれました。ハーディー夫妻は新島先生がアメリカ滞在中に大変面倒をみてくれた人です。日本に帰って同志社を創ってからも、生涯両親のように慕っていた人です。

ハーディー夫妻の援助で新島先生は、フィリップス・アカデミーという高等学校に進みました。高等学校である程度の中等教育を受けた後、アーモスト大学に入学いたしました。アーモスト大学を卒業した後は、アンドーヴァー神学校に進んで計九年間、アメリカとヨーロッパで過ごされたのです。ハーディー氏や、アーモスト大学の当時のシーリーという総長が、日本からきた苦学生に、手を差し伸べ、教育の機会を与えるという、アメリカ人の善意によって九年間、新島先生は過ごすことができました。これも一つの出会いであり、同志社創立のきっかけになったのではないかと考えています。

もう一つ、新島先生がアメリカ滞在中に大きな出来事がありました。岩倉具視を団長とした岩倉使節団が米欧を視察することになりました。一八七一年に廃藩置県を明治政府は断行いたしました。次の年にこれからの国家の形を学ぼうと、岩倉具視を団長に木戸孝允など、明治維新で活躍した人を都合一年半をかけて、米国とヨーロッパに派遣しました。その中には女子の児童が何人かいました。有名な津田梅子さんは七歳でありました。津田梅子さんは佐賀藩主の娘さんでありました。これからは女子教育が必要だということで、梅子さんの父が岩倉使節団に参加させたのです。津田梅子さんは、アメリカで新島先生と会っていて、一緒に写した写真も残っています。津田梅子さんは東京に津田塾大学を創設した人です。津田梅子さんは、使節団とともにアメリカを訪問した後、留学をしているのです。岩倉使節団がワシントンにきた時に、新島先生に声がかかり、これから通訳として使節団に加わって欲しいということで、新島先生はこの後、アメリカとヨーロッパと一緒に周り、教育制度を視察する機会を得ることができました。この経験が、新島先生がキリスト教に基づいた大学を創ろうとした時に大きく役に立ちました。そして、どうして新島先生が山本覚馬さんに会うことができたのか。京都府の知事や、早稲田の大熊重信などと知り合うことができたのか。あるいは学校設立の許可や寄付を得ることができたのか。それは木戸孝允が岩倉使節団に参加していたということが、大きな要因になっていたのです。もしあの時、岩倉使節団がアメリカ

力に來なければ、新島先生は日本に帰ってきても、京都で薩摩屋敷の跡が手に入ったかどうかは大きな疑問です。もしかしたら、他の地に同志社ができていたかもしれません。その使節団に参加することによって、脱国、その当時の法律を犯したわけではありますが、その赦免状と正式なパスポートをもらっています。そういう岩倉使節団と知り合うことができたことは、新島先生にとって大きな出会いではないかと思ひます。先ほど申し上げた脱国の時の、福士卯之吉とセイヴォリー船長、上海からボストンまでのテイラー船長や船主のハーディー氏、アーモスト大学シーリー総長、岩倉使節団、そういう偶然の大きな出会いが、同志社設立につながっていったのではないかと考えています。一八七四年十月に新島先生は日本に帰ることになりました。帰って来る直前に、ヴァーモント州ラットランドに行っています。アーモスト大学から北に車で三時間行ったところにグレース教会があります。そこで、新島先生は、あるキリスト教の団体の年次集會で、演説をしました。原稿を読まずに、その場で、新島先生は日本でキリスト教主義の学校を創りたいという演説をしました。都合、五千ドルほどの寄付が集まりました。一八七四年十月九日のことです。演説が終わった後、新島先生の所に一人の農夫がやってきて、自分は歩いて帰れるので、汽車賃だけでもと、キリスト教主義の大学を日本に作るために、ニドルしかないけれども使ってほしいと渡されました。この農夫から、寄付されましたニドルは新島先生にとって、最も想い出に残っている出来事、感動した出来事だったと後に述べています。

話は変わりますが、当時のニドルで、だいたい一三〇マイル汽車に乗れたそうです。一三〇マイルといひますと約二〇〇キロです。だいたい二〇〇キロの距離を農夫は歩いて帰ったのではないか。二〇〇キロといひますと、ラットランドのグレース教会からアーモストまでが、約二〇〇キロ、一三〇マイルぐらいになります。同志社大学は、今年創立一三〇周年を迎えます。と言ひわけで、この秋、同志社の学生たちで、ラットランドのグレース教会からアーモスト大学までを歩く「新島メモリアル・ウォーク」を学生支援センターが企画しました。九月十二日にグレース教会を出発し、九月十六日にアーモスト大学に到着する計画です。私は二〇〇キロを歩くのは大変ですから、アーモスト大学で歩いてきた学生たちを待ち受けることにしようと思ひています。記念すべき鉄道運賃。そのニドルを懐に抱いて新島先生は日本に帰って來られました。

故郷に飾る錦は

日本に帰って來られたのは一八七四年十一月です。その時に詠まれた歌があります。

「故郷（ふるさと）に飾る錦は匣（はこ）の中 身に纏（まと）ふべき時にあらねば」

日本を出る時は故郷に錦を飾るという決意で出て行きましたが、アメリカから帰ってきた時は、自分は大きな教育という事業を考えている。今は故郷に錦を飾るということを封印しよう。これが、新島先生三十一歳の時の歌であります。最初に詠んだ歌は、新島先生二十一歳の時であります。ですから、この十年間で考えがすっかり変わったことがわかります。一人で出国し、一人で教育を成したわけではありません。すべて、貴重な出会いによって自分の考えを大きく温められ、そしてお金を頂戴して帰って來ることができた、という先生の思ひが、この十年間の歌の変遷に込められているのではないかと思ひます。

新島先生が日本に帰って來られて、先ほどお話ししました、岩倉使節団の木戸孝允が、京都府の榎村知事を紹介し、山本覺馬さんと知り合ひます。山本覺馬さんに、京都府との土地の折衝をお世話になりました。もともと今出川校地の土地は六七〇〇坪あったと聞ひています。薩摩藩邸、薩摩屋敷でした。山本覺馬さんは明治維新前後は薩摩藩邸に匿（かくま）われていたというエピソードも残っています。そしてこの土地を買われた。そして、寺町丸太町を上がった所に新島旧邸があります。一八七五年十一月二十九日に、そこに、六人の学生と新島先生、もう一人の教師の八名の礼拝でもって同志社は始まりました。

同志社は今年、創立一三〇周年を迎えます。順調であつたかといひますと、そうではありませんでした。八名の学生から始まりまして、発展したきっかけは、明治九年に、熊本バンドと呼ばれた熊本からの学生たちの入学です。その頃熊本に、熊本洋学校という、ジェーンズというアメリカ人の教師が教えた学校がありました。その学校は日本人を集めてキリスト教や洋学を教えていました。近くに花岡山という山があります。その山に何十人かの学生が集まって、キリスト教を信奉する誓いをたてました。熊本市民はそのことに驚き、彼らを排斥します。熊本ではやっていけないということになり、ジェーンズさんが、京都で新島襄が英学校を創ったのでそこに移るように勧め、熊本バンドという一団の学生が同志社に入ってきました。彼らは非常に優秀でありまして、彼らが入ってきたことによって、同志社は大きな発展をとげました。ご存知かもしれませんが、徳富蘇峰や蘆花、後に同志社の総長になる海老名弾正などはすべて熊本バンドの人たちです。彼らが入学してきたことによって、同志社は大きくなりました。私は熊本バンドが同志社を創った一員であると考えています。

同志社は、一八七九年六月に第一回の卒業式を行いました。卒業式は朝の十時から夕方五時までかかっています。卒業生は十五名でした。一人ひとりが二十分間英語でスピーチをして、夕方五時前になって、新島先生が最後にはなむけの言葉を送りました。

“Go, go, go in Peace. Be Strong. A Mysterious Hand will guide you!”

「力強く進みなさい。見えざる神様の御手が皆さんを導くであろう」この言葉は現在、寒梅館のハーディーホールの後部、ちょうど真正面のところに刻まれていますので、また見ておいてください。

その卒業生の十五名のうち、すべてが熊本バンドの人でありました。ただ新島先生の大きな悩みは、同志社英学校は大学ではありません。優秀な学生を育てても、すべて東京の帝国大学や他の大学に行ってしまう。やはり、すばらしい学生を育てるためにはどうしても同志社英学校の次に大学を創らないといけない、というのが大きな願ひでありました。現在、同志社大学の入学式では、新島先生が創りたいと願った叫びでもある「同志社大学設立の旨意」を朗読することになっています。結局、同志社大学は新島先生が生きておられる間にはできませんでした。一九一二年に専門学校令によって同志社大学に、そして一九二〇年によく大学令による同志社大学になりました。新島先生がお亡くなりになられたのが、一八九〇年で四十七歳ですから、それより三十年間、大学を作るために月日を要しました。その三十年間で優秀な学生が同志社英学校に來て、そして東京や京都の帝国大学や各界で活躍するようになっていました。一九〇四年になってようやく、学生の徴兵の猶予が専門学校令によって与えられました。専門学校令による最初の社長は原田助という人です。大学を創るということは、新島先生の悲願でございました。ようやく、一九一二年に大学が出来上がりました。同志社大学創立にあたって、大きな精神的な支柱があつたということは確かであります。そして、多くの方々が金銭的にも精神的にも支援してくださいました。そのような人々と新島先生が会合されたからこそ、同志社大学は出来た。また、発展したと言えます。ここは新島大学ではありません。新島先生を中心とした同志、あるいは同じ志を持った、英語ではOne Purposeと言っておりますが、同じ志をもった者の集まりであるということが、そこでわかるのではないのでしょうか。

いしかねも透れかしとて

他の大学には、カリスマ的な一人の創立者が創られた大学もあるかもしれませんが、同志社の場合は、私はこれらの人々なしには、同志社はなかったと思ひます。しかし、中心に流れているのは新島精神、そしてその元にあつたのが私は新島先生ではないかと思ひます。新島先生がクリスチャンであり宣教師であつたことも大きな魅力で、多くの方を引き付けたのだと思ひます。同志社英学校がキリスト教主義であつたからこそ、クリスチャンである熊本バンドが京都にきたわけです。彼らが、同志社を大きくしてくれたのです。新島先生は一八九〇年一月二十三日に大磯で亡くなられました。急性腹膜炎だったと言われております。新島先生はその正月に漢詩を読まれました。その最後の一行に、「尚社図を抱いて此の春を迎う」とあります。社図というのは大きな計画、それを抱いてこの春を迎える、ということです。そしてその後次の歌を詠まれました。

「いしかねも透れかしとて一筋に 射る矢にこむる大丈夫（ますらお）の意地」

石も鉄も貫くような強い意志の矢、自分の意志は石や鉄をも通るような強いものである、という歌を最後に作られました。この歌によって、私は、新島先生の強い意志を知ることができます。新島先生は、教育事業の完成には二〇〇年かかると言っております。まだ七十年あります。一八九〇年に新島先生の放たれた強い矢、私たち教職員はその放たれた矢を、次から次へと射続けております。二〇七五年が同志社創立二〇〇年です。その矢を教職員、あるいは学生それぞれが放ち続けていかなければならないのではないかと考えています。

新島先生の最初の歌は、「武士（もののふ）の思ひ竜田の山紅葉 にしき着ざればなど帰るべき」。二つ目は、帰国の際に詠んだ歌、「故郷（ふるさと）に飾る錦は匣（はこ）の身に纏（まと）ふべき時にあらねば」。三首目は、亡くなる数週間前に詠んだ「いしかねも透れかしとて一筋に射る矢にこむる大丈夫の意地」です。この三首の歌の中に新島先生の強い思ひが込められている。二十一歳、三十一歳、四十七歳の時の歌です。私は感銘を覚えます。同志社を創った方はたくさんおられます。そういった方々を私はこれからたくさん創っていかねばならないと思ひます。

二〇〇五年四月十三日 同志社スピリット・ウィーク
水曜チャペル・アワー「奨励」記録